

ジンメルの貨幣論

著者	古川 顕
雑誌名	甲南経済学論集
巻	57
号	3・4
ページ	31-64
発行年	2017-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00002382

ジンメルの貨幣論

古 川 顕

要旨

ジンメルの多分野にわたる著作のなかで、最も体系的で奥深い内容をもつのは、『貨幣の哲学』である。ジンメルの貨幣起源論は、伝統的な物々交換論の枠組みを出るものではないが、有名な「マルタの刻印」に知られるように、初期の貨幣は、その素材価値による自然的発展と国家の保証に基づく人為的側面の両方が組み合わせられて貨幣の一般的受容性を確保するとみる点で、当時としては斬新な考え方であった。彼は、貨幣に対する「信頼」の高まりにつれて、とめどない「貨幣の象徴化」のプロセスが進展すると考えるのである。しかし、ジンメルの貨幣論におけるより重要な貢献は、相対主義原理に立って、「貨幣は関係である」ばかりか、「貨幣は関係をもつ」という「貨幣の2重の役割」を重視し、その実体経済への積極的な役割を是認していることである。

キーワード：貨幣の哲学、貨幣の起源、貨幣の象徴化、信頼、相対主義

目次

はじめに

I ジンメルの貨幣起源論

II 貨幣と信頼の重視

III 貨幣の役割

おわりに

はじめに

ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1857-1918) は、ベルリンで裕福なユダヤ人家族の末子に生まれた。1857年ベルリン大学に入学。歴史学や心理学、⁽¹⁾哲学を学び、27歳で教授資格審査に合格し、以後同大学で私講師としてニ－

チェヤショウーペンハウアーの「生の哲学」をはじめ、倫理学、美学、認識論および社会学の講義を担当した。ジンメルの大学アカデミズムでの経歴は、彼の研究の豊饒さにもかかわらず恵まれていなかった。当時のドイツにおける反ユダヤ主義の風潮が主たる原因とされている。結局、彼は1914年、56歳のときにシュトラスブルグ大学の哲学の教授に就任したが、それは彼の死の4年前であった。貨幣現象・貨幣問題についてのジンメルの研究は、1889年にシュモラーの政治学のゼミナールにおいて、「貨幣の心理学」について報告し、それがいわゆる『シュモラー年報』——正確には『ドイツ帝国立法・行政・国民経済年報』(Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich)——に掲載されたことに始まり、1900年に初版が出版された大著『貨幣の哲学』⁽²⁾として結実した。

ジンメルの著作は、『貨幣の哲学』の出版前後にも数多く出版されている。ジンメル著作集全12巻に限ってみても、その対象分野は哲学、社会学、経済

(1) 私講師(Privatdozent)というのは、ドイツ特有の制度で博士号(Doktor)を取得し、さらに教授職にはついていないが、教授資格論文を書いて教授資格試験(Habilitation)に合格した研究者に与えられる称号であり、国から俸給を得ることなく講義を行う大学教員である。ただし受講する大学のそれぞれの講義について学生が授業料を支払う制度があり、これによって俸給こそないものの、授業料の多寡に応じて私講師は収入が得られる仕組みになっていた。

(2) ジンメルの履歴について詳しくは、Spykman, N. J. [1925], "The Life of Georg Simmel" (pp. xxIII-xxix), Honigsheim, Paul. [1950], Dunkan [1959], Levine, D·N [1971], 阿閉 [1959] 第1章および Simmel [1957] ジンメル著作集12『橋と扉』の「編者序文」を参照されたい。

なお、ジンメルの主著『貨幣の哲学』の原著は、1900年にドイツの Duncker & Humblot 社から Georg Simmel, Die Philosophie des Geldes, Berlin として出版された。その後、1907年に第2版、1920年に第3版、1922年に第4版が出版されている。第2版においていくつかの加筆が行われているが、第3版以降の各版には変更点はない。本稿では第4版を底本とする訳本(居安 正訳、白水社、1999年)を用いているものの、翻訳が不明瞭あるいは不適切な場合は、Simmel [1978], *The Philosophy of Money*, translated by Tom Bottomore and David Frisby, London, Routledge & Kegan Paul を参照している。

ジンメルの貨幣論

学、心理学、歴史学、宗教学、道徳学、美学・芸術などきわめて多岐にわたっている。彼はこれらの多様な領域を深耕し、多くのすぐれた業績を残した。没年までの著書は25冊、論文は実に225本の多くを数えるとされている⁽³⁾。しかし、その中で最も体系的で内容も充実し奥深いのは、何といても『貨幣の哲学』であろう。出版からすでに110年以上も経っている。1980年代のいわゆる「ジンメル・ルネッサンス」⁽⁴⁾を契機に、『貨幣の哲学』をはじめとするジンメルの膨大な著作についての評価が高まり、とりわけ『貨幣の哲学』についての研究が飛躍的に増大した。

しかし、こうした研究成果の蓄積にもかかわらず、現時点でも『貨幣の哲学』などの著作内容を正確に把握することは容易ではない。その理由としては主に次の3つが挙げられる。第1に、ジンメル著作集の中に『貨幣の哲学』をはじめ、『生の哲学』、『文化の哲学』、『芸術の哲学』、『哲学の根本問題』、『歴史哲学の諸問題』といったタイトルの著作が含まれているように、ジンメルの著作はいずれも哲学的言辞に溢れ、哲学をベースにしているため、その内容を理解するのは余程の哲学の専門家でない限り困難をきわめること、第2に、ジンメルの学問的視野の豊かさと力量の深さを反映して、『貨幣の哲学』をはじめとする各著作は、哲学、社会学、経済学をはじめとして多くの学問分野にわたっており、全体として統一的に把握するのは容易ではないこと、第3に、『貨幣の哲学』に記述された内容には、深い洞察と豊かな発想が見られる反面、表現が回りくどく、しかも断片的で必ずしも体系的ではないという精粗両方の内容が混在していること、が指摘できるように思われる⁽⁵⁾。一方、ジンメルの著作に対して次のような評価があることも事実である。

(3) 阿閉 [1959] 1ページ。

(4) 「ジンメル・ルネッサンス」については、山之内 [1989] を参照されたい。

(5) フリスビー (D. Frisby) は、『貨幣の哲学』の経済学的基礎を検討する際に直面する難題として3つ指摘している。第1は、『貨幣の哲学』の「序文」において、「これらの研究の一行たりとも経済学について述べたつもりはない」というジンメ

「ジンメルの文体は、同じドイツ語を語る人によって高く評価されているけれども、彼の文体のもつ難しさが彼に対する理解を妨げていることも事実である。が、反面また、そこに魅力もあるわけで、下界の事象を生きたままで自分の思考の網目に引き入れ、これを料理する手練は、まさに入神の技といっても言い過ぎではない」(阿閉 [1959] 6-7 ページ)。

さてジンメルの著作、とりわけ『貨幣の哲学』には、出版直後と異なってその内容についての理解が進むにつれて、次第に高い評価が得られるようになった。そうした代表的な評価を2つ挙げておきたい。例えば、ドイツ歴史学派を代表する著名な経済学者シュモラーは『貨幣の哲学』について次のように述べている。「この研究においては、至る所に価値、分業、信用についての根本問題が検討され、貨幣の心理学的および哲学的な取扱いによって新しい光が与えられている。だが本書の本来の目的は、貨幣経済、とくに19世紀の近代経済が、人間と社会および両者の関連と調整に果たしたものを証明することにある。貨幣は、いわば近代の経済生活およびその遂行の中心点、鍵、中核として把握されている。貨幣は近代経済の核心において解明され、説明されている。国民経済的ではなく、心理学的な真理が、文化史的背景に基づいて探求されている」(Schmoller [1901] S1-2)。

ル自身の経済学に対する否認である。「彼の主題に対するジンメルのアプローチは、それゆえ単一の学問的分野に限定されたものではなく、どちらかと言えば、それは学際的 (interdisciplinary) である」(Frisby [1992] p. 81)。すなわち、フリスビーはジンメル特有の学際的研究方法を『貨幣の哲学』の解説を妨げる第1の要因であるとみなすのである。第2の問題として、『貨幣の哲学』において、貨幣は、経済的現象として、心理的現象として、倫理的現象として、文化的現象として、美学的現象として、さらには歴史的かつ哲学的現象として把握されていることである (*Ibid.*, pp. 81-82)。このこと自体は、ジンメルの豊かな力量を示すものではあるが、貨幣概念の統一的な把握を困難にする要因ともなっている。第3は、『貨幣の哲学』の基礎を成す価値理論を構成する最初の2つの章(第1章と第2章)の問題である。これらの章、とりわけ「貨幣と価値」と題する第1章は、ジンメルの価値理論を取り巻く諸困難を露呈しているとフリスビーは指摘するのである (*Ibid.*, pp. 82-83)。

ジンメルの貨幣論

フランケルも、『貨幣の哲学』について次のような評価を下している。「彼の著作が重要性を保持しているのは、貨幣の哲学的分析が、既存の貨幣秩序を擁護するためではなく、貨幣が映し出す観念と精神を批判的に検討するために企てられているからである。これが個性と自由の問題に関連してくることは免れ難いことだった」(Frankel [1977] 邦訳13ページ)と述べたうえで、「私は19世紀の貨幣イデオロギーにこれ以上の光を投げかけている、社会哲学の著作を知らない。これは経済学者からはほとんど無視されてきたが、社会学者はこうした誤りを犯してはこなかった」(*Ibid.*, 邦訳14ページ、傍点は引用者)と加えている。

本稿の構成は次のとおりである。第Ⅰ節では、「貨幣の起源」についてジンメルの見解をフォローする。上に述べたように、『貨幣の哲学』を中心とするジンメルの著作に関して現時点では数多くの著書・論文があるけれども、筆者が知る限り、不思議なことにジンメルの貨幣起源論に言及した文献は皆無であるように思われる。その点を考慮して、とくにジンメルの貨幣起源論に力点を置いて考察することにした。第Ⅱ節では、ジンメル貨幣論の大きな特色である貨幣に対する人々の信頼について詳細に検討する。第Ⅲ節では、貨幣の果たす「2重の役割」について精察し、ジンメルの強調する貨幣の本質論を組上に載せる。最後に、以上の検討結果について要約し、ジンメル貨幣論の独創性・先見性を指摘することにした。

Ⅰ ジンメルの貨幣起源論

貨幣の起源について、ジンメルがどのように考えたかを知るうえで参考になるのは、次のような記述であろう。「貨幣の歴史的な起源——決して確立しているわけではない——がどのようなようであったにせよ、少なくとも確かであるのは、貨幣はその純粋な概念に対応する完成した要素として突然に経済のなかに現れたのではなく、ただ既存の価値あるものからのみ発展することが

できたという事実である。その場合、あらゆる交換可能な事物の一部分を形成する貨幣の質はかなりの程度ある特定の事物において実現され、貨幣の機能は最初はやはりあたかもそれ以前の価値の重要性と密接に関係するような形で果たされた」(Simmel [1922] 邦訳95ページ)。この一文に示されるように、ジンメルの貨幣起源論自体には、ほとんど独創的な見解は織り込まれていない。従来 of 伝統的な考え方を踏襲していると言っても差し支えないように思われる。すなわち、貨幣は金銀などの貴金属、家畜をはじめとしてさまざまな価値を有する既存の事物から生成したというのである。この点を確認するために、ジンメルの見解に即して具体的に明らかにすることにしよう。

ジンメルの貨幣起源論は、基本的には従来 of 伝統的な考え方、すなわち物々交換が成立するための必要条件として、取引当事者の間で「欲求の二重の一致」(double coincidence of wants) という厳しい制約を克服するために自然に生成したという Jevons [1875] の考え方に立っている。ジンメルは次のようにいう。「未開の部族が現物の交換単位をもち、金属貨幣をもったより高く発展した近隣の部族と取引を行う場合、この現物の単位は往々にして後者の鑄貨と同じ価値をもつとして取り扱われる。こうした古代アイルランド人がローマ人と関係をもったとき、彼らは彼らの価値単位である雌牛を銀1オンスと等しいとした。安南の野蛮な山岳部族は単に物々交換しか行わないが、水牛を基本価値とし、平地のより洗練された住民との取引の場合、後者の貨幣単位の一定の大きさの銀の延べ棒は、1頭の水牛と等しいと評価される。同じ根本的特徴は、ラオスの近く of 野蛮な種族によっても現れている。彼らは交易のみを行い、彼らの単位は鉄の斧である。しかし、彼らは砂金を採取し、これを近隣の部族に売り、これが彼らの量る唯一の対象である。そのためには、彼らはとうもろこし粒以外の他の手段をもたず、そこで彼らはそれぞれ1個の斧の代わりにそれぞれとうもろこし1粒の金を売る」(Ibid., 邦訳113-114ページ)。この記述が示すように、ジンメルはいわゆる原始貨幣

(primitive money)の世界にも踏み込み、物々交換の詳細な事例を挙げるのである。

こうしてジンメルは貨幣の起源についての考え方を述べ、それを踏まえて貨幣制度の変遷についても言及する。ジンメルによれば、「原始的な経済段階ではいたるところで使用価値が貨幣として現れる。すなわち家畜、塩、奴隷、タバコ、毛皮などである。貨幣がどのような仕方でも発展したにせよ、それは最初とはとにかく価値、直接に価値として感じられるものであったに違いない。印刷された紙切れの代わりにきわめて価値ある事物を手放すということは、目的系列のきわめて大きな拡大と信頼性においてはじめて可能であり、これによって確かに生じたのは、直接には価値のないものもさらにわれわれを助けて価値を得させるということである」(Ibid., 邦訳123-124ページ)。事物同士が直接に交換されるときには有用な素材であるという実体価値が不可欠なのである。そういう意味で、「最も必要で最も価値あるものが最初に貨幣となる傾向があるということである」(Ibid. 邦訳124ページ)。

ただし、そうであったにせよ、貨幣の歴史からすれば、ジンメルが指摘するように素材価値はいつまでも重要な位置を占めたわけではない。「貨幣がその素材価値からみて直接に価値があると感じられなければ、それは交換手段としても価値尺度としても成立することができなかったであろう。これを現在の状態と比較すれば疑いもないことであるが、貨幣がわれわれに価値があるのは、もはやその素材が直接に必要なで不可欠な価値と考えられるからではない」(Ibid., 邦訳125ページ、傍点は引用者)。金や銀に代表される鑄貨は、機能価値への抽象化が進んだものとして現れ、紙幣も「金属への指図証券」から「まったく無準備の紙幣」となるという抽象化の道を突き進む(Ibid., 邦訳125-126ページ)。つまり、「貨幣」から「信用」への流れが定着することになる。

ところで、完全に象徴的な貨幣(抽象的貨幣)に移行するまでの段階とし

て重要であったのは、ヴァージニアのタバコ、カロライナの米、ニューファウンドランドの^{ほうだら}榛鱈、中国の茶、マサチューセッツの毛皮などの消費的貨幣 (*Ibid.*, 邦訳135ページ) と抽象的貨幣の混在であった。ジンメルによれば、消費的貨幣と抽象的貨幣の両者の混在のなかにあって、「きわめて効果的な中間を示すのは、やはり装飾貨幣、すなわち金と銀とである。というのは、装飾貨幣は抽象的貨幣ほど移り気でもなければ無意味でもなく、また消費的貨幣ほど粗野でもなければ特異でもないからである。明らかに金銀は、貨幣をこの上なく容易に、この上なく確実に象徴化へと導く担い手である」 (*Ibid.*, 邦訳135ページ) と述べ、そして「貨幣はその作用を単なる観念として、何らかの代表的な象徴と結びついた観念として行うのである」 (*Ibid.*, 邦訳131ページ) という。

そればかりではない。彼は次のようにも述べている。「正確に考えると、貨幣の実体価値でさえ機能価値にほかならないからである。いかに貴金属が単なる実体としてのみ尊重されるにせよ、それが尊重されるのはそれでも例えばそれで身を飾り、人を目立たせ、技術的に利用でき、美的な喜びを与えるなど、——それゆえそれが一定の機能を果たすからである。貴金属の価値は決して自立したその存在のうちではなく、常に単にそれが果たすものの中に存在する。すなわち、貴金属の実体はすべての実際的な事物の実体と同じように、それが果たすものを無視して純粹に実体としては、世界の内のものともどうでもよいものである」 (*Ibid.*, 邦訳157-158ページ)。こうしてジンメルは「貨幣の象徴化」(あるいは経済学でいう「貨幣の無体化」)のプロセスを的確に指摘するのである。

ジンメルはまた、古代ロシアの貨幣について次のような特殊な、しかし後世の歴史に残る事例を報告している。「古代ロシアからの報告は、質的に規定される表現から量的に象徴的な表現へのまったく特徴的な移行を提示する。そこでは最初はテンの毛皮が交換手段として通用した。しかし取引の経過に

ジンメルの貨幣論

において個々の毛皮の大きさも美しさもその交換力のすべての影響力を失い、それぞれの毛皮がまったく単に一枚の毛皮としてのみ、しかも他のすべてと同じものとして通用した。ここから生じた毛皮の数の唯一の重要性が引き起こしたのは、取引が増大するにつれて毛皮の耳が単に貨幣として使用され、結局は政府によって刻印されたと思われる皮の小片が交換手段として流通するまでになった。ここできわめて明らかな純粹に量的な観点への還元がいかに価値の象徴化を担い、この象徴化に基づいてはじめて貨幣がまったく純粹に実現したということである」(Ibid., 邦訳128-129ページ, 傍点は引用者)。この引用文のテンについての記述は興味を引く。

というのは、ふつうはおそらく見逃すような事象ではあるが、ジンメルはテンの毛皮に刻印されたとみられる皮の小片に着目し、それが有名な「マルタの貨幣」と同一視するのである。(この点についてはすぐ後に詳述することにする)。なお、アインツヒ(Paul Einzig)の大著『原始貨幣』(*Primitive Money*)の第2篇第27章には、「ロシアの毛皮貨幣(fur money)」と題して次のように述べられている。「毛皮が中世ロシアの通貨であったとの主張を支える民俗学的な証拠もある。kunaという言葉は、テンの毛皮から生じた貨幣一般を表すのに用いられた。事実、テンの毛皮は中世後半までロシアの通貨単位であった。……この貨幣の使用の初期局面の間は、毛皮は鼻や手がそろっていなければならなかった。すなわち、もし爪が欠けているならば、それらは支払いに際して受け取られなかった」(Einzig [1966] p. 268-269)。このアインツヒの記述は、テンについてのジンメルの知見が正しいことを確認している。ジンメルの博学にはただただ驚くばかりである。

ジンメルの博学ぶりは、『貨幣の哲学』の随所に見出される。彼はアフリカにおけるマリア・テレジア銀貨(Maria-Theresa thaler)に注目し、次のような事実を報告している。「アフリカのいくつかの地方では、マリア・テレジア銀貨は、それが本物として受け取られるためには白くてきれいでなけれ

ばならないのに、他の地方ではまったく脂じみ汚れていなければならない。しかし第2にそこになければならないのは、いま受け取られた貨幣は同じ価値のために再び支出されるという信頼である。ここでもまた不可欠で決定的であることは、〈銅ではなく信頼〉——経済圏への信頼であり、経済圏は提供された価値量を、そのために受け取った中間価値である鑄貨と引き換えに、いかなる損傷もなく再びわれわれに保証するということである。このように2つの側面から信頼を与えることなしには、誰も鑄貨を使用することができないであろう。この2重の信頼にしてはじめて不潔でおそらくは識別しがたい鑄貨に一定の価値量を与える。人間の相互の信頼がなければ、社会それ自体が崩壊するように——」(Simmel [1922] 邦訳170-171ページ、傍点は引用者)。

以上の貨幣の歴史についてのジンメルの見方は、きわめてユニークで独創的である。とりわけ、貨幣の抽象化・象徴化への流れが、「深くにある文化傾向の中への貨幣の発展が順応する」(*Ibid.*, 邦訳131ページ)と断じていることは興味深い。彼によれば、「さまざまな文化水準を特徴づけるのは、それらがどの程度まで、そしてどの点においてそれらの関心の対象への直接の関係をもつか、そして他方、それらはどこにおいて象徴の媒介を使用するのかにしたがってである」(*Ibid.*, 邦訳131ページ)。結局、国によって程度の差はあれ、貨幣経済の浸透と相まって、「知的な抽象化する能力の上昇は、貨幣がますます純粋な象徴となり、その固有価値と無関係となる時代を特徴づける」(*Ibid.*, 邦訳136ページ)のである。こうしてジンメルは貨幣の本質を明らかにするためには、貨幣とその実体的な担い手である素材とを概念的に区別し、実体を捨象して貨幣の純粋な本質を問題とすることが必要であり、この区別のないことが「無限の誤謬」(*Ibid.*, 邦訳95ページ)の原因であると主張する。

この点についてのジンメルの指摘は鋭い。「貨幣の本質についての論争は、

ジンメルの貨幣論

どこにおいても次の問題に貫かれている。すなわち、貨幣は価値の測定と交換と表示の機能を果たすためには、それ自体価値であり、またあらねばならないか、それとも貨幣はそのためには、価値物と同じ本質を持たずとも、それらを代表する計算札のように、固有の実体価値を持つことなく、単なる記号や象徴でありさえすれば、十分であるか否かである。この問題は、貨幣論と価値論の最後の深みにまで達しているが、しばしば説かれた論理的な根拠がはじめからこの問題を解決するのであれば、この問題の客観的で歴史的な論究はすべて無用となろう」(Ibid., 邦訳110ページ)。

金属貨幣に関するジンメルの見解はこうである。「金属貨幣の価格は逆説を含んでいる。すなわち鑄貨は価値が少なければ少ないほど、ますます価値多きものとなることができる。というのは、素材価値の不足は貨幣を一定の機能的な目的に適合させ、それによって貨幣の価値はほとんど無限に高めることができるからである」(Ibid., 邦訳183-184ページ)。

ジンメルは信用と貨幣(正貨)の関係についても以下のような興味深い指摘を行っている。「信用と正貨とは簡単に相互に交換されるだけでなく、一方が他方のより活発な活動を生み出すということが注目される。……貨幣と信用とがともに同じ程度増加することはそれらが同じサービスを与えることを示すものであり、それらの機能の一つが高められると、他方もまたより生き生きとした活動を引き起こされる。このことは、貨幣と信用の間の他の関係、すなわち信用は正貨を不必要にするという関係と矛盾しない」(Ibid., 邦訳189-190ページ)。すなわち、信用と貨幣(正貨)の間には、一方が他方を刺激しながら、他方では互いに制限したり取って代わるという2重の関係が存在するというのである。つまり、「信用の意義は、より大きな正貨流通を引き起こす一方、この正貨流通に取って代わり、これら両者の交換手段が提供するサービスの一体化を示すことである」(Ibid., 邦訳190ページ)と主張する。

先にも触れたように、ジンメルの貨幣起源論は「欲求の二重の一致」という物々交換の困難を克服するために、その素材自体が価値をもつ貴金属などの商品を貨幣の起源とみなし、経済取引の拡大につれて「貨幣の象徴化」が進展するプロセスを考察する。ジンメルは基本的にはこうした伝統的で常識的な考え方を受け入れている。ただし、ジンメルはこれまでの論者にはない独創的な見解を提起し、貨幣の発展は、その国の文化傾向の深い底流に順応するものであり、貨幣の抽象化・象徴化への流れも、そうした一国の文化傾向・文化水準の反映であるという斬新な視点を打ち出していることであろう。

II 貨幣と信頼の重視

ジンメルの貨幣起源論は、従来の論者には見られない博学ぶりと奥深さを示していることは確かである。ただし大局的に見れば、その考え方は基本的には従来の伝統的な考え方、すなわち物々交換が成立するための必要条件として、取引当事者の間で「欲求の二重の一致」という厳しい制約を克服するために自然に生成したという点では、ローやマルクス、メンガーの主張と共通する⁽⁶⁾。

ただし、ジンメルの貨幣観がローやマルクスあるいはメンガーなどの伝統的な貨幣起源論者と大きく異なるのは、貨幣に対する信頼 (trust) ないし信用 (credit) をきわめて重視したということであろう。この点は、ジンメルの次のような記述からも窺われる。「保証された紙幣でさえ、たんなる買い手と売り手の間の [支払い] 約束にすぎない小切手とは異なり、買い手と売り手の間の支払い約束としてではなく、最終的な支払いとして機能するという理由から、この区別は買い手と売り手との間の取引にとって無意味であると議論されてきた。このような問題提起は、社会学的な背景に深く迫っては

(6) ロー、マルクス、メンガーについては、古川 [2016]、同 [2017] を参照されたい。

ジンメルの貨幣論

いない。社会学的な観点から見ると、疑いのないことであるが、金属貨幣もまた支払い約束であり、その受け取りを保証する集団の規模によってのみ小切手と異なる。貨幣の保有者と売り手との間の共通の関係——この社会的集団にとって、提供されるサービスに対する貨幣所有者の要求と、この要求が満たされて支払われるであろうという売り手の信頼——こそは、貨幣取引が物々交換とは異なって実現される社会学的な状況を提供する」(Ibid., 邦訳170ページ、傍点は引用者)。この記述は、ジンメルが金銀などの金属貨幣でさえ「支払い約束」にすぎないとみなし、また財・サービスの売買取引における買い手(貨幣保有者)に対する売り手の信頼を重視していることを如実に示している。

金属貨幣と信用貨幣が混在する時代に、ジンメルの次のような記述は刺激的である。「金属貨幣は信用貨幣の絶対的な対立物とみなされるのが通常であるが、実際には金属貨幣にも独特な仕方で絡み合っている2つの信用についての前提がある。第1に、日常の取引では、鑄貨の品位の検査は実行されない。貨幣を発行する国家への公衆の信頼がなければ、あるいはおそらくは鑄貨の名目価値に対してその実質価値を確定できる人々への信頼がなければ、現金取引を発展させることはできない。マルタ(Malta)の鑄貨の刻銘——銅ではなく信頼(non aes sed fides)——は、信頼という要素なしには、いかに完全な価値の鑄貨でさえほとんどの場合、その機能を果たすことができないことをまったく適切に示している。……第2に、受け取られる貨幣は同じ価値で再び支出されるという信頼がなければならない。ここでもまた不可欠で決定的であるのは、銅ではなく信頼——経済圏の能力への信頼であり、経済圏は提供された価値を、そのために受け取った中間価値である鑄貨と引き換えに、何の損失もなく再びわれわれに保証するという信頼である。これらの2つの点で信用を与えることなしには、誰も鑄貨を使用することはできない」(Ibid., 邦訳170ページ、傍点は引用者)。(7)

て不潔でおそらくは識別し難い铸貨に一定の価値量を与える。人々が相互にもっている一般的な信頼がなければ、社会それ自体が崩壊するだろう。というのは、いかにわずかな関係しか他者について確実に知っているものに基づいておらず、いかにわずかな関係しか、信頼が合理的な証明や個人的観察ほどには強くないならば、そのような関係はしばらくの間も持続しないだろう。同様に、信頼がなければ貨幣取引も崩壊するだろう。しかしこの信頼は一定の仕方でニュアンスをもつ。貨幣の価値が基づいているのは、交換手段と引き換えに一定の数量の商品を獲得できるという受取人の信頼であるから、あらゆる貨幣は本来は信用貨幣であるという主張は、まだ完全には適切ではない。というのは、そのような信頼に依存するのは貨幣経済のみならず、すべての経済一般でもあるからである」(Ibid., 邦訳170-171ページ、傍点部分は原文ではゲシュベルト)。

こうしてジンメルは2つの側面から信頼を与えることなしには貨幣が利用できないし、この「貨幣の2重の信頼」がなければ、貨幣取引は崩壊することになるだろうというのである。ここでの「貨幣の2重の信頼」とは、金属というものでできている「铸貨それ自体」への個別的信用と、貨幣がすべての人々に使われるために必要とされる経済社会に対する全体的信頼である。貨幣が一般的受容性をもつ交換手段として、その貨幣に対する人々の信頼が必要であることは当然ではあっても、それが具体的にどのような信頼であるかを明確にした点で、ジンメルの指摘は見逃しえない⁽⁸⁾。彼は貨幣について考

(7) Snodgrass [2003] p.238 には、Inscriptions としてコインに書かれた文字の一覧が表示されている。その中に、マルタ (Malta) のコインがあり、それには「Non Aes Sed Fides (Not Bronze (Money) but Trust)」とラテン語 (Latin) で記述されている。

(8) 铸貨と貨幣の関係については、次の記述が有用である。「铸貨と貨幣とが同義であった2000年以上ののち、この新しい貨幣形態が知的なパズルを与えた。その答えのいくつかはアリストテレス派の商品貨幣論からの出発(離脱)を導き、すべての貨幣は信用であるという考えを導いた。それらは「信用の貨幣理論」(monetary

ジンメルの貨幣論

えることのできる「信頼」あるいは「信用」には、人々の貨幣に対する信頼と、その貨幣の背後に存在する貨幣経済そのものが正常に機能することについての信頼の2種類があると指摘したのである。

ジンメルはしかし、この種の信頼にとどまらず、宗教的な信仰に象徴される異次元の信頼の重要性をも強調する。彼はいう。「信用の場合、ある人の信頼の場合には、この種の信頼になお加わるのは、記述し難い追加的な要素であり、これは宗教的な信仰において最も明確に具体化されている。人が神を信じるといふとき、このことはただ単に神についての知識の不完全な段階を表すのみならず、知識とはまったく無関係の心的状態であり、それは知識よりも少なくとも多くもない。“誰かを信じる”と言いながら、一体彼の何を信じるのかを追加もせず、あるいはそれについて考えもしないのは、きわめて微妙で奥深い言い方である。それは、われわれの存在者 (being) についての観念と存在者それ自体との間には、一定の関係や統一性があるという感情であり、存在者についてのわれわれの概念のある種の首尾一貫性であり、この概念への自我の傾倒における確実性と無抵抗性である」(Ibid., 邦訳171ページ)。このジンメルが重視する「宗教的な信仰」に象徴される異次元の信頼については、すぐ後にもう一度取り上げることにしたい。

ジンメルは実体貨幣(金属貨幣)と信用貨幣の関係について次のように指摘する。「貨幣所有が与える個人的な安心という感情は、おそらく国家的・社会的な組織と秩序への信頼の最も集中的で最も先鋭的な形式と表明とである。この金属価値がすでに前提されているとすれば、いまや金属価値はあの

theory of credit) というよりも「貨幣の信用理論」(credit theory of money) を含意した。これらの考えは貨幣制度が金属本位制の不在において有効に機能した。例えば、イギリスでは1797年の金本位制の停止と1819年のその再開が貨幣の性質についての長期の厳密な議論を引き起こしたのである」(Ingham [2004] p. 39)。なお、ここでの「信用の貨幣理論」と「貨幣の信用理論」については Schumpeter [1954] 邦訳717ページを参照されたい。

両面的な信頼によってはじめて貨幣取引のために実用的となる。それゆえ、ここでもまた示されるのは、実体貨幣から信用貨幣への発展は、思われるほどに根本的ではないということである。なぜなら、信用貨幣とはすでに実体貨幣の中に決定的な仕方では存在していた信用要素の進化と独立化とは分離して解釈されるからである」(Simmel [1922], 邦訳171-172ページ)。すなわち一言で述べると、貨幣は社会的信頼のシンボルになるというのである。

ジンメルは『貨幣の哲学』において、マルタの鑄貨の刻銘（銅ではなく信頼）の例を引いて、貨幣を発行する政府への公衆の信頼がなければ、あるいは貨幣（鑄貨）の名目価値に対してその実質価値を確定できる人々への信頼がなければ、いかに完全な価値の貨幣でさえその機能を果たすことができないだろうと指摘し、また受け取った貨幣が再び同じ価値をもって支出できるという社会に対する信頼がなければ、誰もその貨幣を使用することはできないだろうともいう。彼は『社会学』においても、信頼の重要性について次のように主張する。「信頼は、実際の行動の基礎となるほどに十分に確実な将来の行動の仮説として、まさに仮説として人間についての知識と無知との間の中間状態なのである。完全に知っている者は信頼する必要はないであろうし、完全に知らない者は合理的には決して信頼することができない。信頼に基づいた個々の実際の決定を可能にするためには、どの程度の知識と無知が互いに混ざり合っていなければならないか。この問題が時代と関心領域と個々人とを区別する」(Simmel [1908] 邦訳359ページ、傍点は原文ではゲシュペルト)。

ジンメルは『貨幣の哲学』や『社会学』に先立って、『宗教社会学』においては、「信頼・信仰・信念」という3つの概念の類似性と重要性を指摘してこう述べている。「自我への信念、他者への信頼、神への信仰、これらの結果がきわめてしばしば類似しているということは、これらのすべてが単に社会学的な客体よりして異なっているが、同じ心的な緊張状態の表現に過

ぎないということから生じてくる。……われわれがあらゆる証拠を超えて、しばしばあらゆる証拠に逆らってさえ、人間あるいは社会全体への信頼を固持するという——このことは、社会を結合させる最も強固な紐帯の一つである」(Simmel [1898] 邦訳263ページ⁽⁹⁾)。このようにジンメルが宗教のなかに見出したものは、人間と人間の間の相互作用であり、この相互作用のうちにもみられる信頼と統一とであったとすることができよう⁽¹⁰⁾。

(9) ドイツ語では、「信頼」と「信念」および「信仰」の3つは同義語として同じ *Glaube* という単語で表現される。このことは単なる偶然というよりも、これらの間に密接な関連があることを暗示している。ジンメルが *Glaube* という一語を信頼＝信念＝信仰と論じたのは、ジンメル自身よりもドイツ人一般の精神的特性と密接にかかわっているように筆者には思われる。

(10) ニーチェは、ドイツ語の *Schuld* には「負債」と「義務」の意味があるということから、「義務の意識」は「物質的な負債」から生まれたと考えたが、言語学者のナタリー・サルトウ＝ラジュ (Nathalie Sarthou-Lajus) は、『借りの哲学』という興味深い著作のなかで、フランスの言語学者エミール・バンヴェニスト (Émile Benveniste) を紹介している。『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集1』のなかで、バンヴェニストはこう書いている。「本章の目的は、イラン語やラテン語、ゴート語、ギリシャ語などいくつかの言語で、『貸し付け』および『借用』、『負債』といった言葉が、より一般的な言葉から特定化、あるいは分化して成立した過程を考察するところにある」(Benveniste [1969] 邦訳174ページ)。(本節との関連から言えば、『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集1』の第15章(債権と信頼)および第16章(貸与、借金および負債)は是非とも参照に値する)。ナタリー・サルトウ＝ラジュによれば、「現在、フランス語には *devoir*——『義務』という言葉があるが、*dette*——『負債』も、最初は『何かの代わりに何かをしなければならない』という『義務』の意味で使われていた。それが時代を経るにつれて、『お金を返さなければならない』という経済的な意味に特化され、現在の『負債』の意味になったのである。この例を見てもわかるとおり、『負債』はもともと、物質的、経済的、法的な意味には収まりきれない言葉であった。それよりも、もっと本質的な意味——社会的、道徳的、宗教的な意味を持っていたのである。《負債》ではないが、こういった例はほかにもある。例えば、多くの語源学者は、*créance*——『債権』と *croissance*——『信頼』の関係を指摘している。この両者の語源はラテン語の『信じる』、とくに『神からの庇護を願って、信じる』という意味の *credere* (クレデーレ) という言葉である。また、アラビア語の *Din* (ディン) という言葉は、『宗教』、『信仰』という意味を持つが、それと同時に『負債』という意味も持っている。ちなみに、アラビア語の単語は、子音を2つから4つ組み合わせた『語根』から派生してきているが、その言葉の意味語根は d-y-n であり、それが意味するところは「債務」

である」(Sarhou-Lajus [2012] 邦訳95-97ページ)。

またサンスクリット語学者で宗教史家のシャルル・マラムー (Charles Malamoud) はバラモン教の儀礼に関する研究を通じて、バンヴェニストと同様、「物質的な負債」は《負債》の一面にすぎず、『神に対する債務』のほうが、より本来的であり、それは《生まれながらの借り》であると指摘する。マラムーによれば、バラモン教のなかには「負債の神学」というものがあり、「これは人間が神から時間を限って『命』を借りていると考えるもので、その意味では、人は生まれながらにして債務者なのである。そしてこの場合、最大の債権者は誰かと言うと、冥府の神ヤマである」(Ibid., 邦訳98ページ)。「『命』が神から借りたものだとすると、人は皆、《借り》を背負って生まれてくる。《借り》とともに生き、最後の瞬間まで《借り》を負っている。人間は神から『命』を借りて、死の瞬間にそれを返さなくてはならないのである」(Ibid.)。

アグリエッタ・オルレアン編『貨幣主権論』も、「神と債務」との関係を理解するのに示唆に富む視点を提供してくれる。同書の「序説」では、「貨幣への全体的アプローチ」として「生の債務」と呼ぶ仮説について次のように述べている。「原初的ないし本源的な債務は、生きた諸個人の存在を構成しているだけでなく、社会総体への永続性をも作り上げている。これが生の債務である。元々の意味においては、生の債務は、生者たちが主権のパワー(神々や祖先)に依存していることを表している。その場合、主権のパワーは、自らの源である宇宙の力の一部を生者たちに与えているのである。生命の自己維持を可能にする力の贈与は、その代償として、賦与された生命力を——生涯を通じて——生産するという義務を生者に対して課す。返済は不断になされるが、生者の労働および日常の中で、特に供養・儀礼・献納を通じて、主権を構築し共同体を打ち固めるのである」(Aglietta-Orléan [1998] 邦訳39-40ページ)。

『貨幣主権論』の第1章(「ヴェーダ・インドにおける祭式行為への支払い」)は、インド最古の宗教文献であり、バラモン教の根本聖典であるヴェーダ(Veda)について、マラムーの興味深い分析がなされている。この第1章の最後にマラムーは次のように述べている。「われわれは生まれたときに、生まれるという事実だけから、債務を負い、債務者へと形成されたのだとされる。債務を履行するために、われわれは供物を捧げるよう努めているのだし、テキスト[ヴェーダの文献——引用者]もわれわれに供物を捧げるよう強制している。同様に、生者の死者に対する義務、および生者たちが相互に負う義務を正当化するのは、起源はないが最初から負っている債務、すなわち原理的な債務なのである。御言葉[ヴェーダの啓示的なテキスト——引用者]が人間を債務者として定義することができるのはなぜかという、それはもっぱら、人間が御言葉に対して信仰の義務を負うからにはかならない。人間は、御言葉を絶対的に限りなく信頼する義務を、換言すれば、御言葉に際限なく信用供与する義務を負っている」(Ibid., 邦訳89-90ページ)。

マラムーは、ヴェーダ・インドの祭式行為について次のようにも説明している。「祭式的行為への[謝礼の]支払いは、スラッドハー、すなわち「信頼」、「信仰」

ジンメルの貨幣論

ジンメルは、初期の論文「貨幣の心理学のために」のなかで、貨幣と神の共通性・親和性について次のように述べている。「もの悲しい口調や辛辣な口調で、貨幣はわれわれの時代の神であるといわれてきたとすれば、貨幣と神は一見相容れないもののようにみえるけれども、両者の間には実に意味深い心理的な関連が見出される」(Simmel [1889] 邦訳158ページ)。「他のすべてのものを所有する安心感とは違って貨幣を所有することが与える安心感についてであって、この感情は、信者が自分の神のうちに見出すものに心理的に対応している。すなわち、どちらの場合にも、われわれが切望した対象のうちに見出すのは、個別的なものの超越であり、われわれにこの個別的なるもの、より低級なるものをいつでも与えることができ、いわば再びこうしたものへ転化できるという、最高の原理の全能への信仰である。信仰の形式における神とまったく同様に、具体的なもの形式における貨幣は、実践理性の行き着く最高の抽象物である」(Ibid., 邦訳158-159ページ)⁽¹¹⁾。

以上から明らかなように、ジンメルは貨幣に対する人々の信頼が重要であることを繰り返し強調し、信頼こそは社会関係を形成する基礎的要因であるとする。彼は、信頼・信用・信仰の間に密接な三位一体の関係があることを指摘した。まさにジンメルが、信頼の社会学的研究に先鞭をつけたと言えよう。

ただし、ジンメルは貨幣に対する人々の信頼を重視する一方、貨幣に対する信頼の基盤として国家の貨幣鑄造権をも重視する。彼は言う。「貨幣のう

(このサンスクリット語はラテン語の動詞クレド(信じる)に通じており、その過去分詞クレディトゥムはフランス語「クレディ」の語源である)の決定的な要素である」(Ibid., 邦訳75-76ページ)。このマラムーの言葉は、上に述べたバンヴェニストの記述ときわめて類似していることが容易に理解されよう。国も時代も宗教も異なるとはいえ、「債務」、「負債」あるいは「義務」という言葉が深い宗教的背景をもっていることには驚かされる。

(11) こうした貨幣と神の共通性・親和性についてのジンメルの独創的な考え方は、浜 [2001] の「神と貨幣」と題する論文でも紹介されている。

ちにも特許に相当するものが存在する。それは国家の貨幣鑄造権であり、これによって非合法者が貨幣の着想を実現するのを防止するのである。貨幣の希少性は、貨幣が貴金属から成り立つ場合は部分的に、貨幣が紙幣や小銭である場合は全面的に、国家のこの独占権に基づく」(Simmel [1922] 邦訳198ページ)。先にも触れたように、ジンメルは貨幣と神との心理的な同質性に着目するという、どちらかと言えばやや非現実主義的・神秘主義的な見方に立つ一方、貨幣が自然発生的に生じたとの貨幣自生説を支持し、さらにマルタの鑄貨に代表されるような貨幣に対する国家保証ないしは国家の貨幣鑄造権をも重視する。この点で、ジンメルが幅広い視野と複眼的な視点に立脚していることは明らかであろう。

ところで、ジンメルの継承者とされる社会学者ニクラス・ルーマン (N. Luhmann) もジンメルに言及しつつ、貨幣に対する信頼について論じている。ルーマンは『信頼』(Vertrauen) という著書のなかでこう述べている。「貨幣とは……、一定の範囲内においてさまざまな財を選択する譲渡可能な自由にはかならない。貨幣の場合、交換のチャンスは限定的な量に還元されており、貨幣所持者がいつ、誰と、いかなる対象について、どのような条件のもとで交換を行うのかは、未決定になっている。貨幣は、交換の自由をこのように抽象化することによって選択の自由を保証している」(Luhmann [1973] 邦訳90-91ページ)。すなわち、貨幣所持者は貨幣保有額の範囲内であれば、購入の意思決定を自由に行うことができ、貨幣システムによって無意識のうちに保証されているのである。したがって貨幣所持者は、貨幣の使用を安心して延期することができる。なぜなら、貨幣の使用を将来に延期したときでも、貨幣は他の財とは違って、取引で受け取りを拒否されることはないという信頼が確実に得られるからである。もちろん、この分権的メカニズムがその機能を果たすためには、貨幣それ自体が信頼を得ていることが不可欠の前提となる (*Ibid.*, 邦訳91-92ページ)。

その一方で、ルーマンはこうも述べている。「貨幣価値の安定性と多様な使用チャンスの持続性を信頼している者は、基本的には、既知の人物に信頼をおいているのではなく、あるシステムが作動しているという前提のもとで、そのシステムの働きに信頼をおいている。こうしたシステム信頼は、貨幣を使用する過程で、絶えず確認される経験を通じて、いわばおのずと築き上げられたものなのである」(Ibid., 邦訳92ページ, 傍点は引用者)。「貨幣は、未規定な将来の予期の実現をすでに現在の段階で保証しうる確実性の等価物として、同時に他の多くの形態の信頼の機能的な等価物でもある。しかも貨幣によって充足されうる欲求領域のなかでは、貨幣は、幅広いタイム・スパンを用意し、危険を吸収するという同一の機能を、より正確にしてより有効な形式のもとで遂行する。それゆえにく人格的な信頼への水路を断ち切っているからである」(Ibid., 邦訳94-95ページ)。こうしてルーマンは、「人格的信頼は、文明化の諸条件のもとで一種のシステム信頼に変わる」(Ibid., 邦訳127ページ)と述べ、文明化の進展にともなって「人格的信頼」から「システム信頼」へ移行すると主張する。

ルーマンの「信頼」についての分析は、これにとどまらない。彼は、「信頼に対する信頼」の問題をも考察する。ルーマンによれば、信頼に対する信頼は、いかなる信頼を信頼するのかに応じて、いくつかの異なったパターンに分けられる。「個人は、自分の感情に感情を抱いたり、自分の思考について思考をめぐらしたりしうるように、自分自身の信頼を信頼することができる。さらに個人は、他者が自分を信頼していることを信頼することができる。そして最後に、個人は、他者が自分と同じやり方で第三者を信頼していることを信頼することができる。いかなる形態の信頼が選ばれるかに応じて、信頼の適用可能性、信頼のリスク、そしてそこから派生する問題は異なってくる」(Ibid., 邦訳128ページ)。こうしてルーマンは「信頼」の中身が重要であると指摘する。そして個別の「人格的信頼」には限度があるのに対し、

「システム信頼は、他者もまた〔システムの機能的能力を〕信頼しており、この信頼の共通性が意識されていることに基づいている。……システム信頼の合理的な基礎は、やはり他者の信頼に対する信頼にある」(Ibid., 邦訳129-130ページ)。ジンメルが「信頼」の社会学的研究の嚆矢であるとするれば、ルーマンはジンメルを基礎として、「信頼」の体系的で底の深い分析を展開した第一人者であると思われる。

Ⅲ 貨幣の役割

貨幣の役割ないし貨幣の機能といえば、現代の貨幣・金融論では、交換手段、価値尺度、価値貯蔵の3つをあげるのが普通である。交換手段とは、財・サービスの購入が貨幣との交換の形をとり、また債務の弁済が貨幣をもってなされるように、貨幣が社会的に承認された、すなわち一般的受容性 (general acceptability) を有する支払いの手段として、あらゆる経済取引の対象と交換される働きを指している。また価値尺度とは、財・サービスの市場価値を表す共通の尺度 (ないし計算の単位) としての貨幣の機能である。さらに価値貯蔵とは、貨幣が任意の財・サービスを任意の時点で購入できるという交換手段として機能する限り、財・サービスの販売によって得られた貨幣を直ちに支出する必要はなく、将来における何らかの支出目的のために、ある一定期間、「資産」として保有する役割をいう。これが貨幣の3大機能といわれるものである。このうち、最も重要な貨幣の機能は交換手段としての機能である。なぜなら、価値尺度としての機能をもつのは交換手段としての貨幣でなければならないという論理的な必然性はないし、価値貯蔵の手段も貨幣だけにとどまらないからである。しかし、交換の媒体であり、社会の成員の誰からも躊躇なく受け取られるという一般的受容性を有するのは貨幣のみであり、この点においてこそ、貨幣の最も基本的な特質が認められるのである。⁽¹²⁾

ジンメルの貨幣論

ジンメルは貨幣の役割（あるいは貨幣の機能）について次のように述べている。「貨幣そのものが所有する価値を貨幣は交換手段として獲得した。それゆえ、交換すべき何物もないところでは、貨幣はまったくいかなる価値ももたない。なぜなら、保存手段と輸送手段としての貨幣の意義は、明らかに交換手段と同列に立つのではなく、むしろ交換機能からの派生であり、交換機能がなければ、貨幣は他のこれらの機能を決して果たすことはできないであろう。これに対して交換機能そのものは、これらの機能から独立している」（Simmel [1922] 邦訳142ページ）。ジンメルが交換手段としての貨幣の機能に貨幣の最も「本質的な機能」を求めたのは、現代の貨幣・金融論と同じである。以上の伝統的な貨幣の役割についての基本的な考え方は、ジンメルの見解とは大枠では変わらない。ただし、ジンメルが貨幣の役割を問題にするとき、まずは彼が重視する「相対主義」について考察する必要がある。

1 ジンメルの相対主義

相対主義 (Relativismus: relativism) とは、一切の事象を相対的と考える哲学的な立場であり、哲学および倫理学の概念である。このうち哲学の主分野の一つ認識論では、一切の事物の認識は主体と客体とのさまざまな関係によって制約され、相対的妥当性しかもたないという考え方に立つ。また倫理学では、価値の普遍妥当性といったものを否認し、価値は自己の経験や文化的諸要素により変化すると考える。この相対主義にとって重要な論拠の一つは主観性である。主観性とは、事物の把握の仕方が、個々の主体に依存していることを意味する。すなわち、相対主義の認識論的な根拠によれば、個々の主体によって把握された事象は、個々の主体の感じ方や捉え方に依存しているので、それとの相対的關係においてしか存在しない。この相対主義に

(12) 古川 [2014] 16-20ページ。

対して、個々の経験や文化的な経緯に依存せず、どのような観点から見ても真理であるか、あるいは正しい命題があるという考え方は絶対主義 (Absolutismus: absolutism) と呼ばれる。

相対主義の考え方は非常に古いようである。それは、古代ギリシャの哲学者でソフィストの代表的論客とされるプロタゴラス (Protagoras) にまで遡ることができる。プロタゴラスは、ある人には風は暖かく感じられ、他の人には冷たく感じられるので、風そのものは暖かいのかそれとも冷たいのかという問いには答えがないと述べている。このような見解は、「万物の尺度は人間である」という彼の言説に凝縮されている。すなわち、あらゆる事象 (万物) に対する判断基準は自分自身という人間なのであり、万物の尺度を客観的な原理や観測に求めることは不可能である。あくまでも個々の人間の主観が物差しとなるのであって、人間に共通する絶対的判断基準は存在しないというものである。⁽¹³⁾前置きはこのぐらいにして、ジンメル⁽¹³⁾の相対主義についての見解を具体的に追ってみよう。

ジンメル⁽¹³⁾の相対主義的な考え方は、彼の著作のあちこちに散見されるが、『貨幣の哲学』に先立って『社会分化論』のなかに集中的に見出される。この初期の著作において彼は次のようにいう。「すべてのものはすべてのものと何らかの相互作用の状態にあり、世界のあらゆる点と他のあらゆる点との間には、作用力と往来する関係とが存続する」(Simmel [1890] 邦訳17ページ)。「諸部分の相互作用がわれわれの社会と名づけるもののもとで行われる

(13) 哲学・倫理学のバーナード・ウィリアムズ (Bernard Williams) は、相対主義について次のように述べている。「最も簡単な方法にして、最も相対主義的であるのは、個々の主張をそれぞれ異なった対象との関係を表すものとして解釈する方法である。古代ギリシャの思想家プロタゴラス (Protagoras) は一般に相対主義の元祖とされているが、彼はたとえば、私が風を冷たく感じ、あなたがそれを暖かく感じたときのように、対立する感覚から出発し、風「それ自体が」実際には暖かいのか冷たいか、という問題には答えがないと主張した」(Bernard Williams [1985] 邦訳258ページ)。

ことは、誰もこれを否定しないであろう。社会はそれ自体で完結した存在、絶対的な統一体ではない。それは人間の個体がそうでないのと同じである。……社会という統一体がまず存在し、その統一的な性格からその諸部分の統一的な性質や関係に変化が生じるのではなく、むしろ諸要素の関係と活動とがあり、これらに基づいてはじめて統一体について語ることができる」(Ibid.)。「社会はこれらの相互作用の総和にとっての名称に過ぎず、それは単にその相互作用の確定の程度に応じて適用されるに過ぎない。それゆえそれは統一的に確定された概念ではなく程度上の概念であり、所与の諸個人の間には存在する相互作用の数と緊密性の大きさにしたがって、その適用の度も大きくもなり小さくもなる。この仕方において社会の概念は、個人主義的な実在論が社会の概念に認めようとする神秘的なものをまったく失う」(Ibid., 邦訳18ページ)。ここにすでに社会を機能的相対主義に把握しようとする彼の考え方が見られるが、晩年の『社会学の根本問題』になると、彼の見解はもっと積極化される。「社会が絶えず実現されるその活動において常に意味するのは、諸個人が相互に与えあう影響と規定とによって結ばれているということである。それゆえ、社会はもともと機能的なあるもの、諸個人がなしまたなされるものであり、その根本性格からすれば、社会 (Gesellschaft) について語るよりも、社会化 (Vergesellschaftung) について語るべきである。こうした社会はある範囲の諸個人にとっての名称に過ぎず、彼らはそのように行われる相互関係によって互いに結びつけられ、それゆえそれが統一体とみなされる」(Simmel [1917] 邦訳13ページ)。「社会はいわば実体でもなければ、それ自体具体的なものでもなく、むしろ生起であり、ある人の運命と形態とについての、他者の側からの受動と能動の作用である」(Ibid., 邦訳14ページ、傍点は原文ではゲシュペルト)。したがってジンメルにあっては、社会は実体概念としてではなく、機能概念として把握しようということになる。

これらのジンメルの記述は、貨幣は事物の相互関係から形成される経済的価値の純粹な表現であり、その経済的価値を象徴する存在であるという相対主義原理に立脚するジンメル独自の貨幣観が提示されている。ジンメルが相対主義原理を重視したことは以上の引用からも明白であるが、それは相対主義それ自体の重要性を強調するというより、その考え方が次に検討する「貨幣の2重の役割」を知るうえで重要であるとみられるのである。というのは、貨幣の役割を明らかにするためには、貨幣とその他の商品との間の「関係性」についてよく理解することが不可欠であると考えられるからである。

2 貨幣の2重の役割

1980年代からの「ジンメル・ルネッサンス」を一つの契機として、晦渋をきわめるジンメルの『貨幣の哲学』に対する再評価がはじまり、それについての内外の研究書も飛躍的に増大した。けれども、ジンメルの「貨幣の2重の役割」についての議論はあまり注目されることなく現在に至っている。それとともに「貨幣の2重の役割」の議論における「貨幣は関係である」とか、「貨幣は関係をもつ」という命題に対する関心も低調なままであり、多くの論者によっても看過されてきたと言えよう。⁽¹⁴⁾

「貨幣は関係である」、「貨幣は関係をもつ」という独特の表現は、『貨幣の哲学』のなかにただ一度だけ登場するだけである。ジンメルはこう述べている。「貨幣価値の不変性がはじめて客観的な事実として生じるのは、商品もしくは商品領域の価格騰貴が他の商品もしくは商品領域の価格低下に対応するときである。すべての商品価格の一般的な騰貴は貨幣価値の下落を意味するであろう。それゆえこれが生じるや否や、貨幣価値の不変性は打ち破ら

(14) 筆者の知る限り、「貨幣は関係である」、「貨幣は関係をもつ」というジンメル独自の表現内容の重要性を強調し、相対主義の観点から最初に指摘したのは川口[2007]であると思われる。

れる。そもそもこのことが可能であるのは、貨幣が具体的な諸事物の価値関係の表現としてのその純粋な機能を超えて一定の性質を含み、この性質が貨幣を特殊化して売買の対象とし、一定の景気や量的変動や自己運動に貨幣を従わせ、それゆえ貨幣を、それが関係の表現としてもつその絶対的な地位から相対的な地位へと押し込め、こうして簡単に言えば、貨幣はもはや関係であるのではなく、関係をもつということになる」(Ibid., 邦訳103ページ、傍点⁽¹⁵⁾は引用者)。すぐ分かるように、「貨幣は関係である」という命題に対するのは、「貨幣は関係をもつ」という反命題である。すなわち、貨幣は商品相互の間の単なる価値の媒介という役割にとどまらず、実体経済に対して独自の作用を与えるというのである。ここに「貨幣の積極的作用」が認められる。

先述したように、ジンメルは「貨幣の2重の信頼」を重視したが、彼はそれと同様に、「貨幣の2重の役割」を強調する。ジンメルの言葉を借りれば、「貨幣の2重の役割」とは、「貨幣が一方では交換される商品相互の価値関係を測定しながら、しかも他方では自らそれらとの交換に入り込み、こうして自ら測定されるべき大きさを表現する。さらに、貨幣は自己を測定するにもまた一方ではその対価を形成する財によってであり、他方では貨幣そのものによってである」(Simmel [1922] 邦訳99ページ)。というのは、「純粋な金融業務と利付貸借の表現するように、貨幣そのものが貨幣によって支払われるのみならず、為替レートの変動が示すように、ある国の貨幣が他の国の貨幣の価値尺度になるからでもある。それゆえ、貨幣はそれ自体が規範でありながらも、この規範に自己自身を従わせる規範的な表象の一つでもある」(Ibid.) からである。

(15) 「こうして簡単に言えば、貨幣はもはや関係であるのではなく、関係をもつということになる」という記述に対応するドイツ語原書および英語版は以下のとおりである。ドイツ語原書 (Simmel [1989] S. 131) では、“es, kurz gesagt, nicht mehr Relation ist, sondern Relation hat.”。英語版 (Simmel [1978] p. 125) では、“...so that it is no longer reflects a relation, but has relations” となっている。

ところで、「貨幣は関係である」という命題は、貨幣量の増減は、長期的には生産や雇用など経済の実物面には影響を与えず、物価水準を比例的に変化させるだけであるとする「貨幣の中立性」あるいは「貨幣ヴェール説」に基礎を置く考え方であり、新古典派経済学の中心的な命題の一つとされる。この新古典派経済学の命題については、次のような見方が新鮮であるように思われる。「西欧社会においては貨幣は手段として、また個人間諸関係の同質性と、それ[同質性]に結びついた根本的平等性とが自然に発現したものとして現れる。こうしてまったく自然なこととして、貨幣は経済学の対象となる。ところが、貨幣が経済学の対象となるのは、かなり逆説的な意味においてである。実際には、価値・価格の理論は、その基本仮説から貨幣を全面的に排除しているし、貨幣を扱うときでも最後には貨幣の中立性を結論する。ここで、『貨幣の中立性』とは、貨幣が重要な意味を持つ存在ではないことを意味する。貨幣が重要でないということは、経済理論があえてその存在を考慮しなくてよいということであるから、非常に好都合なのである」(Aglietta・Orléan [1998] 邦訳31ページ)。こうした指摘は、従来の伝統的な経済学の貨幣に関するあまりにも狭隘な考え方を鋭く批判し、経済学はもちろん、社会学、人類学、歴史学、宗教学などの広範な分野から、経済学の伝統的な見解を見直す必要性を認識させる。

日本のジンメル研究のパイオニアの一人恒藤恭は、ジンメルについて次のように述べている。「おそらくジンメルは経済哲学の創始者ともいふべき地位にある、と私は考えるのである。その全思想においてきわめて顕著な個性をもっていたジンメルは、あたかもそのあまりに個性的な思想のために、普通の意味における継承者または追隨者を有せず、したがって一個の学派というようなものを、その後に残していない」(恒藤 [1947] 9ページ)。確かにいわれているように、ジンメルがはっきりとした「継承者」あるいは「追隨者」をもっていたとは思えない。そのことは、『断想』(ジンメル著作集第11

ジンメルの貨幣論

卷)におけるジンメル自身の言葉からも窺われる。この巻は彼の他の巻に比べて相当風変わりである。この著作の中心である第I節(「断想」)は、ジンメルの「遺稿日記抄」であり、人間、生、自然、世界、宗教、芸術、精神など実に多彩なテーマについて深い哲学的考察を盛り込んだ166もの断片的文章から成っている。『断想』の執筆年代は明らかではないが、ジンメル晩年の一巻であることは間違いない。

この『断想』の冒頭でジンメルは次のように述べている。「わたしは精神上の相続人をもたずに死んでいこう、それはわかっている(それでいいのだ)。わたしの遺稿は、多くの相続人に分け与えられる現金払いの遺産のようなもので、各人がそれぞれ、自分の分け前を自分の性質に応じて何らかの所得に変えればよいのであって、それがわたしの遺稿から出ていることなど問題ではないのである」(Simmel [1923] 邦訳17ページ)。この記述には、取り立てていうほどの継承者あるいは追隨者をもたず、晩年を迎えたジンメルの孤独な胸中を察するに余りあるし、これまで築き上げた学問的実績に対する彼自身の感懐が織り込められているように思われる。

以下の2つの文も同様に筆者には印象深い。「生命は守られるべきものではなく委ねられねばならぬ。そういうことがわかっていたら、おそらく何びともわたしと同様に生を世界観の中心に据え、生の価値を認めずに違いない」(Ibid. 邦訳24ページ)。「われわれは、それぞれの瞬間が究極目的であるかのよう——また同時に、どの瞬間も究極目的ではなくて、それぞれ一度限りの瞬間がより高いもの、最も高いものへの一つの手段にすぎないかのよう——人生に対処せねばならない」(Ibid. 邦訳38ページ)。このうち前者は、これまで蓄積したジンメルの哲学的営為を実践的生活に適用する道を示唆するもので、「生」への肯定が彼の「遺稿」として述べられている。また後者も、「生」を肯定するジンメルの人生訓が明確に示されている。ジンメルの数多くの著作のなかで、『断想』はこれまでほとんど注目されることはなかつ

たけれども、彼の世界観なり生命観といった根本思想を知るうえで不可欠の存在であるように思われてならない。

おわりに

ジンメルはその大著『貨幣の哲学』において、「貨幣の象徴化」のプロセスを的確に指摘する。彼はテンの毛皮に刻印されたと見られる皮の小片に着目し、それを有名な「マルタの貨幣」と同一視する。マルタ (Malta) の鑄貨の刻銘——銅ではなく信頼 (non aes sed fides) ——は、信頼という要素なしには、いかに完全な価値の鑄貨でさえほとんどの場合、その機能を果たしえないことを適切に示している。

こうした貨幣の歴史についてのジンメルの見方は、きわめてユニークで独創的である。とりわけ、貨幣の発展は、その国の文化傾向の深い底流に順応し、貨幣の抽象化・象徴化への流れも、そうした一国の文化傾向・文化水準の反映であると断じていることは印象的である。ジンメルは、2つの側面から信頼を与えることなしには貨幣が利用できないし、この「2重の信頼」がなければ貨幣取引は崩壊するという。「2重の信頼」とは、金属というものでできている「鑄貨それ自体」への個別的信用と、貨幣がすべての人々に使われるため必要とされる「鑄貨が使われている経済社会」に対する全体的信頼である。貨幣が一般的受容性をもつ交換手段として、その貨幣に対する人々の信頼が必要であることは当然ではあっても、それが具体的にどのような信頼であるかを明確にした点で、ジンメルの指摘は見逃すことができない。ジンメルによれば、人々の貨幣に対する信頼には2種類のものがある。第1は、貨幣自身に付与されている信頼であり、第2は、その貨幣の背後に存在する貨幣経済そのものが正常に機能することについての信頼である。

こうしたジンメルの記述には、貨幣は事物の相互関係から形成される経済的価値の純粋な表現であり、その経済的価値を象徴する存在であるという相

ジンメルの貨幣論

対主義原理に立脚する彼独自の貨幣観が提示されている。彼が相対主義原理を重視したのは、相対主義それ自体の重要性を強調するというより、その考え方が「貨幣の2重の役割」を知り、貨幣とその他の商品の間の「関係性」についてよく理解することが不可欠の前提になるという根拠からである。

ジンメルは、貨幣に対する人々の信頼を重視する一方、貨幣に対する信頼の基盤として国家の貨幣鑄造権も重視する。ジンメルによれば、貨幣の「希少性」は、貨幣が貴金属から成り立つ場合は部分的に、貨幣が紙幣や小銭である場合は全面的に、国家の貨幣鑄造権という独占権に基づく。彼は、貨幣と神との心理的な同質性に着目するという非現実主義的・神秘主義的な見方に立つ一方、貨幣が自然発生的に生じたとの貨幣自生説を支持し、さらにマルタの鑄貨に代表されるような貨幣に対する国家保証ないしは国家の貨幣鑄造権をも重視する。この点で、『貨幣の哲学』をはじめとするジンメルの著作は、いずれも柔軟で幅広い視野と複眼的な視点に立脚していることは明らかである。

ジンメルは、「貨幣は関係である」という彼独自のユニークな命題を提起する一方、同時に、「貨幣は関係をもつ」という反命題を重視する。すなわち、「貨幣は関係である」という商品相互の間の単なる価値の媒介という役割にとどまらず、「貨幣は関係をもつ」という実体経済に対する「貨幣の積極的作用」を認めるのである。「貨幣は関係である」という命題は、「貨幣の中立性」あるいは「貨幣ヴェール説」に基礎を置く考え方であり、新古典派経済学の中核的な命題の一つとされる。ここで「貨幣の中立性」とは、貨幣が重要な意味を持つ存在ではないことを意味する。貨幣が重要でないということは、経済理論があえてその存在を考慮しなくてよいということにはほかならない。ジンメルは、従来の伝統的な経済学の貨幣に関するあまりにも狹隘な考え方を批判し、経済学はもちろん、社会学、人類学、歴史学、宗教学などの広範な分野から、経済学の伝統的な見解にメスを入れるのである。

『貨幣の哲学』の「序文」で、ジンメルは次のように述べている。「生の個性と生の最も深く最も本質的な運動と関連づけ、生の総体的意味にしたがってそれらを解釈することは、観念論の基礎においても实在論の基礎においても、存在の悟性的な解釈のうえでも意志的な解釈の基礎のうえでも、絶対主義的な基礎のうえにも相対主義的な基礎のうえにも実現することができる」(Simmel [1922] 邦訳10-11ページ)。この記述が示すように、ジンメルの『貨幣の哲学』は、貨幣を材料として貨幣が経済活動に及ぼす作用を超えて、さらに広く人間の「生」や「文化」そのものに与える影響を解明するのみならず、貨幣の存在の根本を人間存在の基本条件に求めていると言えよう。

参 考 文 献

(以下に引用した文献については、必ずしも翻訳に正確には従っていない。また、原文献が当用漢字でない場合や旧仮名使いで表示されている場合は、それを当用漢字や現代仮名使いに改めた場合がある。)

- Aglietta, Michael et André Orléan (éds) [1998], *La monnaie souveraine*, Odile Jacob, Paris (坂口明義監訳、中野佳裕・中原隆幸訳『貨幣主権論』藤原書店、2012年)。
- Benveniste, Émile [1969] *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, I. Economie, parenté, société, Eds. Minuit, Paris (前田耕作監修『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集1』言叢社、1986年)
- Duncan [1959] “Simmel’s Image of Society” (*Georg Simmel, 1858-1918: A Collection of Essays*, edited by Kurt H. Wolff, Ohio University Press 所収)
- Einzig, Paul [1966], *Primitive Money—In its Ethnological, Historical and Economic Aspects*, second edition, Oxford, Pergamon Press (first edition, 1949).
- Frankel, S. H. 1977] *Money: Two Philosophies* (吉沢英成監訳『貨幣の哲学——信頼と権力の葛藤』文真堂、1984年)
- Frisby, David [1992] *Simmel and Since: Essays on Georg Simmel’s Social Theory*, London, Routledge.
- Honingsheim, Paul [1950] “The Time and Thought on of the Young Simmel,” in *Georg Simmel, 1858-1918: A Collection of Essays*, edited by Wolff. K. H., Ohio State University Press, Columbus.
- Ingham, Geoffrey [2004], *The Nature of Money*, Cambridge, Polity Press.
- Jevons, W. Stanley [1875], *Money and the Mechanism of Exchange*, London: Kegan Paul,

ジンメルの貨幣論

- Trench, Trubner & Co.
- Levine, D. N. [1971] *Georg Simmel on Individuality and Social Forms*, The University of Chicago Press, Chicago and London
- Luhmann, Niklas [1973] *Vertrauen, ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*, 2 erweiterte Auflage (大庭 健・正村俊之訳『信頼：社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房, 1990年)
- Sarthou-Lajus, Nathalie [2012] *Eloge de la Dette* (高野優監訳・小林重裕訳『借りの哲学』太田出版, 2014年).
- Schmoller, Gustav [1901] *Georg Simmels Philosophie des Geldes*, *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 25, Jahrg, Heft, 17, S1-18.
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(下) 2006年)
- Simmel, Georg [1889] *Zur Psychologie des Geldes*, *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, XIII (「貨幣の心理学のために」大鐘 武編訳『ジンメル初期社会学論集』恒星社厚生閣, 1986, 所収)
- Simmel, Georg [1890] *Über sociale Differenzierung*, *Sociologische Untersuchungen*, Duncker & Humblot (居安 正訳『社会分化論』青木書店, 1998年)
- Simmel, Georg [1898] *Zur Soziologie der Religion: Neue Deutsche Rundschau* 9 (居安 正訳『宗教社会学』青木書店, 1998)
- Simmel, Georg [1908] *Soziologie, Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot, Berlin (居安 正訳『社会学：社会化の諸形式についての研究』白水社, 1994)
- Simmel, Georg [1917] *Grundfragen der Soziologie (Individuum und Gesellschaft)* (居安 正訳『社会学の根本問題(個人と社会)』世界思想社, 2004年)
- Simmel, Georg [1922] *Philosophie des Geldes*, Verlag Dunkker & Humboldt, Berlin (居安 正訳ジンメル著作集3『貨幣の哲学』白水社, 1999)
- Simmel, Georg [1923] *Fragmente und Aufsätze. Aus dem Nachlaß und Veröffentlichung der letzten Jahre*, Hg. Mit dem Vorwort von Gertrud Kantorowicz, München. (土肥美夫・掘田輝明訳ジンメル著作集11『断層——遺稿日記抄——』白水社, 1976)
- Simmel, Georg [1957] *Brüks und Tür* (ジンメル著作集12『橋と扉』, 酒田健一他訳, 白水社, 1976)
- Simmel, Georg [1978] *The Philosophy of Money*, translated by Tom Bottomore and David Frisby, London, Routledge & Kegan Paul.
- Simmel, Georg [1989] *Philosophie des Geldes*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
- Snodgrass, M. E. [2003] *Coins and Currency: An Historical Encyclopedia*, London, MacFarland & Company.
- Spykman, N. J. [1925] *The Social Theory of Georg Simmel*, Russel & Russel Inc., New

- York.
- Williams, Bernard [1985] *Ethics and the Limits of Philosophy*, London, Fontana Press/
Collins and Cambridge, Mass: Harvard University Press. (森際康友・下川 潔訳
『生き方について哲学は何が言えるか』産業図書, 1993)
- 阿閉吉雄 [1959] 『ジンメル』有斐閣。
- 川口慎二 [2007] 「「貨幣の二重の役割」について——ジンメル『貨幣の哲学』の根本
問題——」『広島経済大学創立四十周年記念論文集』。
- 恒藤 恭 [1947] 『ジンメルの経済哲学』改造社。
- 浜日出夫 [2001] 「神と貨幣」(居安正・福田義也・岩崎信彦編『ゲオルグ・ジンメル
と社会学』世界思想社, 2001年所収)。
- 古川 顕 [2014] 『テキストブック 現代の金融』(第3版)東洋経済新報社。
- 古川 顕 [2016] 「貨幣の起源と物々交換(1)——ロー, マルクス, メンガー——」
『経済論叢』第190巻第1号, 35-55ページ。
- 古川 顕 [2017] 「貨幣の起源と物々交換(2)——ロー, マルクス, メンガー——」
『経済論叢』近刊。
- 山之内 靖 [1989] 「ジンメル・ルネッサンスの位相」『思想』11月号, 785号, 4-32
ページ。